



Title	<書評> 大高洋司『京伝と馬琴〈稗史もの〉読本様式の形成』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	図書新聞. 2011, 2998, p. 3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/49361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

もっとも読本らしい読本が いかにして成立したかのドラマ

今後の読本研究者が必ず参照する重要な文献になるだろう

飯倉洋一



本書を細けば、その丹念な文体に著者の人柄が映し出される。著者は所収の全論文に修正加筆を加え、整合性をもつ二書としてまとめたという。本書所収論文の中で最も古いものは一九八五年に書かれた『読本の世界』第一章第一節「寛政享和年間」（本書では「忠臣水滸伝まで）」であり、最新のものは二〇〇八年に書かれた「文化三・四年の京伝・馬琴と『桜姫全伝囃草紙』」である。本書のキーワードである「読本的枠組」や「兄弟作者」という概念は、必ずしも初めから使っていたものではない。ここ十年ほどで著者の読本史構想は急速にその輪郭を明瞭にしはじめた。諸論文は十数年かけて書かれているが、著者の考えはほとんど進んでいない。それを一書にまとめるのは、実際はかなりの忍耐を要する作業であったはずである。しかし、それをしていただいたお陰

で、私たちはもっとも読本らしい読本がいかにして成立したか、そのドラマをじっくりと味わえるのである。

タイトルに掲げた京伝と馬琴は、どちらもよく知られた存在であるが、確執が取りざたされてもきた江戸後期戯作界の両雄である。しかし副題が難しい。「読本（よみほん）」といっても一般読者はほとんどその実体を知らない。江戸時代後期の本格的なエンタテインメントで、その代表作として『里見八犬伝』が挙げられるといえ、イメージできるだろう。さらに「稗史もの」というのも専門用語である。横山邦治が提示した読本様式の一つで、「京伝・馬琴の読本を頂点とする怪奇で複雑な伝奇的構想を有し、そのうえ勸善懲惡・因果応報の理念に支えられた純然たる仮作物語」（『読本の研究』）とされる。しかし、著者はタイトルに関しては直球勝負で来

た。内容の通りなのである。すなわち本書は、「稗史もの」読本様式が、京伝・馬琴の試行錯誤を通して、いかに形成されたかを緻密に跡付けたものである。とくに、「稗史もの」読本成立期において京伝と馬琴は競合し、馬琴が勝利したという通説に対して、京伝・馬琴はむしろ情報交換しつつ読本様式を模索していた「兄弟作者」であるという新説を提示、さらに「稗史もの」読本の長編構成の核として「読本的枠組」があることを指摘している点が大きな特徴である。「読本的枠組」とは著者によれば「人間・動物・モノ・言葉等、様々なかたちで作中に置かれ、物語の発端近くで存在を提示され、以後それと明示されなくとも、場面ごとの展開の背後に強く存在が看取され、結末は例外なく、言葉の謎が解かれるなり怨霊が解脱するなりして、作品世界の中からそれらの存在が消えた時に訪れる」という展開である。

京伝は「稗史もの」前二作まことに存した戯作性・知識性を第三作の『優曇華物語』では排し、高僧の予言を「読本的枠組」に用い、観音靈驗譚という伝統的枠組で覆い、一方、馬琴は『優曇華物語』を稿本段階で参照することで、『月水奇縁』を「読本的枠組」を持った見事な作品に仕上げた。それ以後、京伝・馬琴は

情報を交換しながら読本を制作したという。京伝・馬琴の競合は本屋の仕掛けた販売戦略という見方もあるが、著者は各作品を読み込むことに心血を注ぎ、作品相互の関係を解明する立場に立つ。

本書は読本研究史上不朽の著作である中村幸彦『近世小説史の研究』、横山邦治『読本の研究』を継承し、これを発展させた本格的な読本史研究であり、今後の読本研究に必ず参照する重要な文献になるだろう。

さっと読める内容ではない。やや文章が硬く、行きつ

戻りつながら著者の主張を確かめる形になるかもしれない。しかし、それは著者の長年の妥協を許さない試行錯誤の軌跡を感じることのできる読み方であり、著者の誠実に応える読み方にはかならない。じっくりと読めばいいのである。その重厚な内容は、近年六年間にわたる近世小説の様式研究に関わるプロジェクトを率い、『読本【よみほん】事典』（笠間書院刊）の責任編集にあたった著者の、読本への網羅的な親炙と学識に裏付けられたものである。

（大阪大学教授）